

西伯利亞ブリヤート地方旅行

鳥居龍藏

これからブリヤートの地方に就いてのお話を申し上げたいのであります。丁度私は一昨年半年以上、イルクーツク縣とザバイカル州及び黒龍江州沿海州を旅行致しまして、人類學考古學上の調査を致しました。此の大体のこと旅行した道筋などは、各所で最早申上げてありますから、今日は申上げませぬ、今日お話致したいのは、オーノン河流域に居る所のブリヤートに就いてであります。此のお話は主としてエスノグラフィ——ブリヤートの土俗のことに就いてお話しようと思ふのであります。

此のブリヤートといふ人間はどのあたりに住まつて居るか申しますと、即ちバイカル湖を中心として其の西の方から南に掛け、更に東に亘つて住まつて居るのであります。之を土地の方から申しますとイルクーツク縣とザバイカル州とに跨がつて住まつて居ります。而して此のブリヤートの住まつて居る所の南の方は何處かといふと、御承知の如く外蒙古になります。それから其の西は烏梁海で、亞爾泰山脈の走つて居る所であります。而して北の方は何處かといふと、西の方から走つて居る所のスタノゾオ

イ山脈を界として、ヤクトスクに接して居るのであります。ブリヤートを中心として、周圍の民族はどういふ民族であるかといふと、南の方には御承知の如く内蒙古・外蒙古の蒙古人が居り、其の西南の方に行くと、矢張り蒙古人と同族のカルマークが住まつて居ります。それから其の西の方に行くと、土著民族が住まつて居る。北の方はどうかといふと、ヤクトスクに矢張り土著民族が住まつて居る。それから東の方はツングス民族の領域になります。これが即ちブリヤートを中心として、周圍の民族の地理學的位置であります。露西亞人は無論早くから此の處に入つて參つて、ブリヤートの土地を奪つて露西亞の版圖にして仕まつたのであります。最初ブリヤートは露西亞人に抵抗したのであるけれども、遂に衆寡敵すること能はずして服従したのである。若し露西亞が征服しなければ、外蒙古と一緒に居つたのである。

ブリヤートは御承知の如く、人種學上から申すと蒙古人の一つであつて、其の體質言語に於て他の蒙古人と違つた所を認めませぬ。例へばフィジカルキャラクター即ち體質の方から見ても、身長は中等若くはそれ以上を有つて居るものもあるが、概して餘り大きくない。頭形は極端な廣頭を有つて居るものがあります。蒙古形の目を有し、鼻は一種の特色を有つて長くて且つ扁平である、口は大きく、髯は極く乏しい、天神髯のやうなものが一寸生えて居るだけである。見た所強壯のやうに見えるけれども、此の民族の中には、肺病、微毒性のものが大變あつて、全体から申すと體質が強くない。ブリヤートの或長

老の意見に依ると、我が民族は此の病氣の爲めに亡くなりはしないか。斯ういふことを云つて居る位であります。此のことを精しくお話すると長くなりますから、これだけにして置きます。

次に彼等の話す言葉はどうであるかといふと、純然たる蒙古語であります。蒙古語は御承知の如く、書く言葉と話す言葉と別であります。話す言葉は色々の方言があつて變つて居るが、所謂文語に至つては、内蒙古も外蒙古もブリヤートも同じであります。それであるから書いた言葉といふと、蒙古もブリヤートも同じであつて、文法や言葉の組立ては勿論のこと、單語も能く似て居る。ブリヤート語が蒙古語の一種であることは明かであります。それであるから蒙古語で話の出来る人は、此の地方を旅行しても左のみ困難でない。それから彼等の口碑に従へば、自分等は東の方から移住したもので、祖先は成吉思汗である。斯ういふことを云つて居る、蒙古人であることは明かなのであります。

而してそれがどういふ風に分布して居るかといふと、(地圖を指点して)これがバイカルである、而してバイカルの西の方にイルクーツクがある、それからセレンガの河が之に注いで居ります。丁度此の東の方にヤブロノイ山脈が走つて居つて、自然これで區劃が出来て居る。それであるから其處に流れて居る所のセレンガ、オルコン、トラ河といふやうな河は、皆バイカル湖に注いで一つの流域をなして居る、それからヤブロノイ山脈の西の方といふものは、皆ニセイ河の上流になつて餘程性質が違つて居る。而して此の山脈の東はどうであるかといふと、インゴタ河とオーシシ河が流れて居つて、其の二つ

が合してアムール河の上流シルカ河となる所である。地理學上殊に人種學上からいふと、東と西の境であります。バイカル以東といふのは、ヤブプロイ山脈以東といふことになるのであつて、これは餘程面白い地帯になつて居るのである、けれどもブヤートの今日の分布といふものは山脈に關係無くして、バイカルを中心として東西に分布して居ります。

それから申して置きますが、バイカルの西の方にバラカンスクとイルクーツクがある、又バイカル湖とヤブプロイ山脈との間に有名なウエルフネウヂンスクがあります、ウエルフネウヂンスクは御承知の如く、オルコン河、トラ河、セレンガ河の合流した下流にあつて、非常に大切な所であります。それからインゴダ河、オーレン河の附近にチタとネルチンスクとがあります。これは先達までセメノフ將軍の根據地とした所であります。それでブヤートはどういふ風に分布して居るかといふと、ブヤートは御承知の如く露西亞の統治の下にありますけれども、彼等の固有の制度の組立といふものは、内蒙古・外蒙古と違ひませぬで、アイマークといふものが統べて居る。アイマークは即ち盟であります。此の盟は幾つあるかといふと、ブヤートは八つ許りで成立つて居る、實際をいふと七つで、七の盟を以て成立つて居る。丁度蒙古の組立と同じく、上に盟があつて下に旗がある、滿洲などにも有名な滿洲八旗といふものがある、あの旗である、蒙古語でそれをホシヤウといふ。ホシヤウの下に又村が出来て居るそれであるから盟といふものは非常に大切である。蒙古人も其の部衆を盟で組織して居つて、それを蒙

古語でもアイマークといふ、他の蒙古と同じであります。露西亞人に征服せられない前の制度を、今日も維持して居るのであります。此のアイマークがどういふ風になつて居るかといふと、第一にトングススキーマークがある。これは何處にあるかといふと、烏梁海の庫蘇克爾其爾といふ此の湖の北の方にあります。それからバイカル湖から出てエニセー河に合流する河にアンガラ河といふのがあります。此の流域に居るブリヤートはアンガラスキーマークと申して、アンガラ盟といふ盟があります。それからバイカルの西一寸三四里にある、此あたりから北に掛けて居る所のブリヤートを稱して、インボトホラガスキーマークといふ。それから北の方にどういふものがあるかといふと、云はゞバイカルを真中にして東の方になるのであるが、それにホリンスクアイマークといふのがあります。それからホリンスクの北丁度バイカルの東北に當る方を何といふかといふと、セレギンスキーマークといふ、それからもう一つのアイマークは、オノシ河の流域の一番東にあるブリヤートで、これは何といふかといふと、アギンスキーマークといふ。それからもう一つ飛んで海拉爾の西南の方に、此處にダライナルといふ湖があるが、此の附近に一つのブリヤートの盟とは云はないが一つの集團があります。これで見ると、此のダライナルの分を入れると丁度先づ八つ許りのアイマークが存在して居る譯であります。而して其の八つのアイマークの中心地は郡が八つあります。而して此のアイマークの下にホシヤウといふものが幾つもある。此のホシヤウの下にアイルと申して村が幾つも備はつて居る譯である。兎に角さう

いふやうな風の盟でブリヤートが組織せられて居るのであります。

然らば此等のブリヤートの人口はどれ位あるかといふと、露西亞の政府が一時西伯利亞の土人を調査致したことがあつて、其の時に出來た本があります。これはバツカノフと云ふ人種學者が西伯利亞の國勢調査で集められて居る所の材料に依つて出來た西伯利亞人種統計に依つて見ると、二十萬と書いてあります。けれどもブリヤート自身は二十五萬あるだらうといつて居る。それであるから人口は二十萬から二十五萬の間と見て間違ないのであります。而してこれが同じ言葉を使ひ同じ風俗習慣を持つて居つて宗教も大抵同じである。兎に角色々の点からブリヤートは興味が多い人種であります。

此の二十餘萬あるブリヤート民族は、他の民族と較べてどれ位の割合になるかといふと、西伯利亞で申するアムールの流域であるが、アムール流域はオーノン河から東の方は殆んど黒龍江河口、樺太島に至るまで殆んどツングースの分布地帯であります。これだけの地域に居るツングースはどれだけあるかといふと、一萬四五千しか無いから、ブリヤート人口とは到底較べものになりませぬ。これが餘程面白い關係になつて來るのであります。ブリヤートが今申した所のバイカル湖畔の左右に分布して來たといふことは、これは成吉思汗前後のことである。隨の時代や唐の時代には、ブリヤートは此處に遣入つて居らなかつた。然らば當時此處に居つた民族はどの民族かといふと、土耳其民族であります。即ち今日中央亞細亞に居るボハラ、サマルカント、キルギース高原、あゝいふ方に居る土耳其民族が此處に住んで居つ

たのであります。即ち支那の歴史でいふと突厥である。此處には到る處に石を周圍にたてた古墳があります。露西亞人は之をクルガンといふて居るが、ブリヤートは石の墓といつて自分より前の時代のものと云て居る、此の石の墓はオーノン河の流域から掛けてエニセー河の流域方面まで、到る處に存在して居ります。それからオルコンの流域には、其の時分の城も残つて居り、中から色々の物が出ます。又有名な突厥の碑文もあります、例へば此處にある銅鏃であるが、(標本を示して)これは土耳其民族の残した鏃であります。尙又其の以前石器時代の遺物も各所に残つて居ります。然しそれ等は今日お話致しませぬ。さういふ風に此處に居るブリヤートは、以前土耳其人の居つた跡へ、成吉思汗の前後に這入つて來たのであると稱して居るが、兎に角彼等は東の方から此處に移つて來たものに違ひありません。それで私の旅行致したのは何處であるかといふと、僅かの時間でありましたが、他に調べる地方が多かつた故に、此のブリヤート許りに時を費すことが出来ませぬ。そこで主として歩いたのは、オーノン河の流域にあるアギンスキーアイマークのブリヤート、其の地方を旅行調査したのであります。他のブリヤートは主要此處のお話で明かにならうと思ふ。此の本は大變面白い本で(書籍を示しつつ)ロマノフ家の最後に出版した『アシヤストコエロシ亞細亞露西亞』といふ本は大きな本が二冊あります。此の本の中にブリヤートのことを書いて居るが、私はそれに依らず、實際私の歩いて調べましたことを一寸お話して見たい。

私はブリヤート調査の爲めにオーノン河の流域を選んだのは、どうして特に其處に致したかといふと

これに就いて理由があるのであります。ブヤートの風俗習慣を見ると、西の方に居るブヤートは露西亜化したものが多い。然るに東の方に行くに露西亜化したものが少い。これはどうしてさうであるかといふと、露西亜人が手を着けたのは、西に較べて東の方が極く遅かつたからである。何故かといふと同じ言葉を話し同じ兄弟姉妹の關係を有つて居る所の蒙古人が東南に居り、それから東の方にはツングースが居るといふやうな關係上から、比較的風俗習慣の露西亜化が後れたのであります。現に頭髮はまだ辮髪である。然るに西の方に行けば行く程、ブヤートは散髪になつて居り、露西亜語を話し居る。宗教も西の方に行くと耶蘇教化して居るか、東の方になると佛教若くは固有の薩滿教である。斯ういふ風な關係になつて居ります。それで私はブヤートの居住地として最も東方に位するオーノン河の流域を選んだのであるが、もう一つは此のオーノン河の流域に考古學上の調査をして見ようといふ考があつたのである。それで此の方面を選んだ譯であります。

私が此のオーノン河の流域に参りましたのは、一昨年即ち大正八年八月十九日で、それから廿七日まで九日間此の地方を旅行して調査致しました。丁度此の時々に第三師團が駐屯中で、此の旅行に就いては師團長閣下にお世話になり、色々物質などや其の外のものを頂戴し、一方ならぬ御配慮を被りました。尙又特別機關であるとか軍司令部であるとか、色々の方面からも御補助を得ました。これは明かに茲に感謝する所であります。尙ほ此の行に就いて蒙古通の鈴江大尉も同行せられて、大に便益を得まし

た。又従卒も一人附けて頂きました、渥美某氏といふ伊勢の人で、大變世話をして呉れました。其の外又セメノフ將軍のお世話にもなりました。セメノフ將軍は母はブリーヤート父はスラブで其の間に出来た子供である。何處で生れたかといふと、即ちオーノン河の流域のアクシャといふ處に生れたのである。其處に育つた人であるから、オーノン河地方の地理や其の他の事情に通じ、小供の時の記憶等を参照して色々教へられましたので、大變調査に都合が好かつたのであります。又一行の中にブリーヤート語の出来るコサツク兵を附けて貰ひました。先づそれだけの人数で参つたのであります。

それで八月十九日に瀛車に乗つてチタを出發し、夜半頃にモゴツイといふ停車場に着きました。此の停車場はブリーヤートの地域に置かれた停車場である。一体露西亞の東清鐵道の掛け方は面白い物で、露西亞人の頭には多年の間、海へく、東へく、極東の海へと、どうしても東の海へ出なければ巴まぬといふやうな考があつて、スラブの間に一大問題となつて居つたのであります。それであるから何等かの機會があれば此の雄志を遂げようとする竊かに時機を待つて居たのであるから、一旦清朝から滿洲通過の特權を得るや、矢も楯も溜らず慕々地に東清鐵道の敷設に掛つたのであります。而して其の計畫は地形の如何とか物質の集散とか、さういふことは一切眼中に置かず、唯だ東へく、海へくといふ直線に線路を引いたのであるから、森林であらうが砂漠であらうが、人の住んで居る土地であらうが住まぬ所であらうが、土人の部落であらうが、唯だもう無遠慮に突破して居るのであります。それであるから此處

はオーノン河を渡つてブリヤートの地域に這入つた所で、鐵道の左右前後は悉くブリヤートの村落で露西亞人は居りませぬ。これが非常に面白い所である。例へばダウリヤの停車場の如きもさうで、露西亞は其處は大軍團を收容すべき兵營を設けて居るが、周圍は總て砂漠地で軍人の外露西亞人の居住者はなく唯だ蒙古人が附近に多少住まつて居るだけである。興安嶺の如きも地形の險夷に拘はらず、唯だもう一直線に線路を引いて居る。如何にスラブが大膽であるかは此の東清鐵道を見ても考へられるのであります。それであるから此の鐵道を利用すると、色々の民族の部落を通過して居るから、民族の研究には大變都合が好い、ブリヤートに入るにも此の鐵道を利用すると最も好都合であります。

モゴツイといふ停車場は、これはブリヤート語であります。此處に着いたのは前にも申した通り真夜中であつたが、土地に人家がありません、唯だ露西亞人の驛員の居る家があるだけである。仕方が無いから停車場の切符を切る前の臺の上に寝轉んで夜明けを待つことにしました。其處は檐の下で無論吹通じであるが、其處に眠つてしまつた。翌日夜明けて見ると、丸で原野の中に停車場が出来て居るのであります。これから何方の方に行くかといふと、アギンスコエといふ方に行くのであります、此處から九里許り離れた所である。其處はアギンスコ盟の役所のある所であつて、オーノン河に流れる所のアガ河の流域にあります。御承知の如くオーノン河はインゴタ河と一處になつてシルカ河と稱せられ、黒龍江の主流となつてネルチンスクからステレンスクの方に流れ、其處から始めて下流ハ、ロフスクの方に通

ふ川蒸気船が出るのである。シルカ河は更に流れて行つて、海拉爾の方から流れて行くアイグン河と合して、そこで始めて黒龍江——アムールといふ名になるのであります。即ちアムールの上流はシルカ河で、其のシルカ河を形造つて居る河は何かといふと、オーノン河とインゴタ河である。さうであるから地理學的からいふと、前にも申した通りアギンスキーブリヤードの住んで居る所は、アムルーの上流地帯になるのであつて、バイカル地方ではないのである。バイカルはエニセイ河の上流である。私の参つたブリヤートはアムールの上流で、即ち名高い成吉思汗に關係あるオーノン河の流域であります。オーノン河は蒙古人の極く神聖のものとして尊んで居る河であつて、成吉思汗と非常に關係の深い所である。此のオーノン河を中心とした所に、セメノフ將軍の生れたアクシャがあります。此の地方一帯に露西亞人は居りませぬで、總てアギンスキーのブリヤート許りである。露西亞人は何處に居るかといふと、オーノン河の南の方に居ります。それで最初参つた時に、露西亞コサツクの居る南岸を旅行しようといふ意見であつた。けれどもブリヤートの案内者は、自分の部落の中を行きたい、露西亞コサツクの居る所は面白くないからといふので、即ちオーノン河の北岸を傳つて参つたのであります。

それでモゴツイといふ停車場から、アギンスコエへ愈々向ふことになりました。此の停車場の附近にブリヤートの小さな村落があります。家が丁度五六軒許りで、露西亞人は居りませぬ。アギンスコエ行きに就いて、荷物の運搬などの爲めブリヤートを雇はうとしたが、村の男子は皆牧畜を行つて居りませ

ぬ。妻君だけが居つて、私が行きませうといつて車を持つて來た。而して我々一行の荷物を載せて、アギンスコエへ向つたのであります。ブリヤートの女子は蒙古人と同じく、馬にも乗れば車をも挽き、総てのことが他の民族の女性と違つて、非常に慍悍に出來て居ります。此の妻君もさういふ風で、馬車を御して勇敢に動作して居りました。馬車の通過する所は一面の大陸的廣原で、四顧茫茫として殆んど山を見ませぬ。此の附近はオーノン河の流域であるが、精しく云へばオーノン河に注ぐアガ河の流域で、尙ほ精しく云へばアガ河の支流のト、ホルドといふ河の流域であります。見渡す限り坦々たる地面で、木も伐られたのか焼かれたのか、殆んどなく、只だ草許り青々として何處までも續いて居る。それが皆牧草で、如何に此の地が牧畜に適して居るか分ります。又人家も一つも無い。時々認めるのは突厥時代の墓が生え茂る草の間に点々存在して居るのである、而して其處から銅鏃、銅劔などが發見されるのであります。それを調べつ、此の廣原を進んで參りました。

アギンスコエといふのは、此の地方の盟の役所のある所であります、此の役所の所在地の人口戸數はどれ位あるのかといふと、これは平原に立てられた町で、人家が約百二十戸許り、それで町を形造つて居ります。此の百二十軒の人は殆んどブリヤート若くはブリヤートと露西亞人との雜種であります。露西亞人の家は其の内に四五軒しかありません。而して其の人口は二十人許り、これだけの露西亞人が居るだけで、其の外は殆んどブリヤート許りである。家の建て方は、露西亞風の校倉式に丸太を積んだも

のであります。これで町が出来て居る。町の外は全く茫漠たる曠原で、殆んど一物の目を遮るものが無い。此處に希臘教の寺院が一ヶ所と學校も一つある、露西亞人の先生二人とブリヤートの教師三人で教へて居る。役所はアギンスキイの盟の役所と、盟の下のホシヤウの役場と二つあります。其處の役人が色々私共一行の爲めに世話をして呉れて、其の隣りの露西亞人の家に泊めて貰ひました。先づこれが此の地方の中心地で、此處を離れるともう斯ういふ町はありません。皆ブリヤートの部落になつて仕まう露西亞人はオーノン河の南の岸に住まつて居る許りで、其の外の地帯といふものは、殆んど皆ブリヤートの游牧地となつて居るのであります。

アングスコエに一晚泊つて、翌日からオーノン河流域の旅行を始めたのである。翌日暫らく行くと、大きな喇嘛廟があります。これはアギンスキイ盟の四つのホシヤウから成立つて居る寺であつて、喇嘛の坊さんが其處に千人許り居ります。大きな寺が四つもあつて坊さんが千人も集まつて居るから、殆んど一つの寺町をなして居る。丁度叡山や高野なども、斯ういふやうに僧侶の町が出来て居つたのであります。此の町の家も皆木で組んである。木の無い所であるが、ザバイカルの北の方インゴタの流域に行くと、木が中々多いから、其のあたりから持つて来た木であります。矢張り校倉式に造つて、坊さん許りの町が出来て居ります。私共は其のお寺に泊つて、翌日トールホルド河の上流に溯つて參りました。昨日經過した所は、前にも申した通り殆んど木一本の無い曠原でありましたが、此の日は木がぼつ／＼

見えて来て、上流に行く程それが多くなつて參る。而して峠に登り氣味になると、前に白樺の林が見えて來た。斯ういふ峠になると、アリヤートは斯ういふ風な幣束を（標本を示して）木に掛けて行く風があります。これはぬさである、蒙古語でハタックといふが、それをアリヤートは白樺の枝に掛けて行きました。それは此の峠を越える時分、どうか無事に峠を通過させて貰ひたいと云ふ、手向であります。丁度日本でも、ぬさも取りあへず手向といつたやうに、此の風も餘程日本人と似て居ります。即ち喇嘛以前の風が残つて居るのである。これは只今申した所のト、ホルド河の上流森林の残つて居る所に、大變それが多く見えます。蒙古人は必ず斯うして通る、朝鮮でも今も此の風があります。日本でも此の風が古い時代にあつた。峠を越して此方の方に来ると、猶ほ廣い曠原になつて居つて、アリヤートのホンヤウが彼處此處に点々散布して居る、それからオーノン河の河畔に出て來た。此のオーノン河には舟も橋も何もありませぬ、蒙古人は上流地帯を馬で渡つて來ます。日本の宇治川でも最初は橋がなく唯だ人馬で川を渡つたものであるが、大水が出た時などは、死ぬものを澤山出すので、橋を設けないと困るといふ所から橋を掛けたと、宇治橋の碑に書いてありますが、オーノン河には其の如く舟も橋もない、皆馬で渡る。それも大水の時流されるものが、どれ位あるか分らない。そこで成るべく上流の淺瀬をを選んで徒涉りで渡るやうにして居る。此のあたりはアリヤートの村落が多く、牧畜を盛んにやつて居る。附近には突厥の古墳が多く、又其前の有史以前の石器も彼處此處に出ます。尤もオロンナヤにはオーノン河に

鐵橋が掛つて鐵道が通つて居りますが、此處は一昨年セメノフとボルセグイキとの間に問題になつた所である。又日本兵がオーノン河を渡つてザバイカルに入る時に、ボルセグイキに此の橋を焼かれて困つた所である。此處は非常に大切な所であります。それから成吉思汗の砦の跡と稱する所も此の附近にあります。昔からバイカル地方と蒙古支那との關係に於て、どうしても此のあたりが必要の所であらうと思ふ。それからオーロンナヤへ參つて、オーノン河の下流の方に段々下つて參つたのであります。此の間にも矢張りブリヤートが游牧して居る。丁度此の間を九日許り私は調査に費した譯であります。

それから露西亞は此等の土地をどういふ風に治めて居るかといふと、これは人種學上からいふと、もとブリヤートの居る所の土地も、其の南の外蒙古の土地も一つのものであつた。それを露西亞が段々東の方に進んで來て此の土地を取り、又滿洲の清朝も段々西の方に進んで來て、外蒙古を自分の方の土地にして仕まつた。それであるから民族的に存在して居る所の一つの土地が、政治上の權力が北と南にある爲めに、一つは露西亞が取り一つは支那が取つたと、斯ういふ譯になつたのであります。けれども、民族から申しても言語から申しても、風俗習慣其の他宗教などから申しても、ブリヤートの土地と外蒙古の土地とは一つになるべき性質を有つて居るのであるが、それが不自然に二つに取られたのである。最初コサツクがザバイカル州に這入つて來た時に、ブリヤートは非常に抵抗したのである、殆んど矢種の盡きるまで抵抗したのである。けれども色々な事から露に敵する能はずして露西亞に土地を取られた

が、それでも久しい間屈服しなかつたのであります。さういふ風にブリヤートは他の民族と違つて、非常に慥悍で知識の程度も高い。随つて露西亞化されて居ない。言葉も矢張り露西亞語に壓迫されないで蒙古語を話して居る。宗教の關係も佛教(喇嘛教)である。それであるから宗教の方は、外蒙古の庫倫の喇嘛、尙進んでは西藏のダライ喇嘛と關係が結ばれて居つて、お寺が中心であります。ブリヤートのこれだけの土地を歩いて見るに、到る所に寺があります。若し贅澤に旅行しようと思へば、寺に泊つて行くといふ不足はありません。ブリヤート二十余萬を收容する七盟の内、どれ位寺があるか分らない程澤山あつて、僧侶の數も非常に多い。而して今は露西亞に屬して居るけれども、此處には喇嘛の中から勢力者が一人選ばれ、この人は活佛で神聖のものとして尊崇されて居ります。喇嘛の坊さんで西藏に學問したのもあり、或は蒙古の庫倫に往つて學問した人もあり、俗人も庫倫方面と始終往來して居ります。第一彼等を着て居る衣服、什器、裝飾物、總て寺の材料は殆んど支那のものである。露西亞のものよりも支那のものが比較的多い。此の点は注意しなければなりません。而して支那人からはまだ苦しめられて居ない、それに支那の材料が多く這入つて居る爲めに、支那に對して非常の尊敬を有つて居ります。さうであるから將來支那人の勢力が宜しきを得たならば、ブリヤートは外蒙古に於けるが如く、支那の範圍に歸するは容易であると考へられる。舊露西亞政府も革命前には彼等の色々懐柔策を講じた爲め、露西亞に歸服し始めたのであります。先達て過激派の爲めに殺された露西亞皇帝が、未だ皇太子の時に日本を訪問さ

れましたが、歸途は、西伯利亞を通過して歸られましたが、其の時に皇太子としての資格でブリヤートの村落に臨まれまして、當時の喇嘛とブリヤートの重立つたものと會見して色々交歡された。此の接觸が非常にブリヤートに好い感じを興へた。其の結果喇嘛の坊さんが露都に往來し遂に同地に喇嘛寺院が建てられ出張所の様なものが出来ました。之から喇嘛と露西亞皇帝とが非常に親しい友達なることになった。さういふ關係から、ブリヤートが段々露西亞に歸服し始め、露西亞の間に好感を有つて、露西亞のブリヤート統治上、非常に都合好くなつて來たのであります。

然るに近來ボルシエヰイキが起つて、折角良くなつて來た此の關係を打壞した。ブリヤートは何方かといふと、舊露西亞を望んで居ります。何故かといふと、只今申したやうな譯でロマノフ家に好感をもち、非常に都合が宜くなつて來て居つたからである。然るにボルシエヰイキをブリヤートは非常に恐れて居ります。何故恐れるかといふと、ブリヤートは家畜を有つて居る。今や露西亞のルーブル紙幣は下落に下落を重ねて、殆んど使へないやうになつて居る。國家の紙幣が斯う玩物同様のものになつて來ると物其のものが貴くなると、物資が非常に値打を生ずる。ブリヤートは駱駝、馬、牛、羊、斯ういふ風な立派な家畜を有して居る。其の肉を食ひ乳汁や膏を用ゐて居れば食物に不足は無い。皮は相當の價があり、毛も價を有つて居る。それであるからボルシエヰイキから見ると、彼等は一つの有産階級をなして居ります。それでボルシエヰイキはブリヤートの村落を侵して財産を掠奪した。爲めにブリヤートは非

常にボルシエヴィキを恐れて、私の參つた時に、若し日本の兵隊が引拂つたなら、後は支那に頼らうかどうしようかと非常に心配して居りました。今日はどんな風になつて居りますか、過激派共產主義者が跋扈して居るさうでありますから、千頭や二千頭の家畜を有つて居るブリヤートは、酷い目に遭つて居ることであらうと思ふ。

ブリヤートは露西亞皇帝に歸服して居つたけれども、從來の風俗習慣其の他色々生活上の状態は昔の儘であつて、其實は露西亞皇帝よりも西藏及び庫倫の喇嘛に信服して居ります。又ブリヤートの方にも一つの神聖なる喇嘛があつて、言はゞ佛教の一つの政治のやうなもので、喇嘛が支配して居る、而して佛教が統一して居ります。ブリヤートが露西亞化されなかつたのは、此の關係であらうと思ふ。唯だ當時ブリヤートの内には、露西亞の大學を卒業して法學士辯護士になつて居るものもあり、又農學校を卒業したのもあり、色々の學者があります。此等の人の意見に依つて見ると、ブリヤートの統治は我々の義務で、而かも今日は最早喇嘛の時代では無い、我々髮の毛の黒いもの——非僧侶が團結しなければならぬといふことに就いて、餘程考へて居るらしく思はれるのであります。此のことは單にブリヤートのみならず、内蒙古・外蒙古に於ても、重立つたものは喇嘛の以外に俗人が中心となつて、蒙古を統一して見ようといふ理想を有つて居ります。これがどういふ風になるか、將來極東に於ける面白い問題として現はれて來るであらうと思ふのであります。

それからブリヤートの教育はどうかといふと、村には此學校が出来て居つて、ブリヤート語と露西亞語と兩方を教へて居る。それであるから此の邊の小供は露西亞語を自由に話します。これは内蒙古・外蒙古のものから見ると、知識の程度はブリヤートの方が發達して居ります。

それから生活の程度はどうかといふと、農業も營ます商業も營ます、皆牧畜を以て生活して居ります。牧畜はどうかいふものを飼つて居るかといふと、馬、羊、山羊、駱駝、牛、斯ういふ種類で、一戸で千頭二千頭飼つて居るものもあります。さういふ關係である爲めに、此の土地は總て牧畜に使はれて居る。私はアギンスキイ盟のブリヤート——オーノン河流域のブリヤートに就いて申すのであります。他の盟のブリヤートも皆同じである。皆牧畜をして居る。而して家畜が盛んな程草を大切に、百姓が農作物を植附けるやうに、草を蒔いたり手入れをしたりしなければならぬ、邪魔な雜草を除らなければならぬ。それであるから一年此方の部分に家畜を置けば、翌年は其處を轉じて他に移り、其處には手入れをして草を生やさすのである。斯ういふ風に毎年牧地變へをする。之を區別するにはどういふ風にするかといふと、例へばオーノン河流域の高い處で、八里も九里ももう少し長い所もあるが、それをずつと柳の籬で圍つて居る。此の圍のを考へると、何となく大陸的氣分がある。丁度萬里の長城を築いたことを想ひ出せるが、併し斯ういふことは、支那人の考よりも北の民族が先づ考へたものらしい。此の柳の枝で長く圍つて居る邊牆が八九里から十里十五里、或は五十里六十里といふやうな風に長く引い

て居る。これには處々に門が設けられて、家畜が其處から出入りして居る。斯ういふ風なやり方で牧畜をやつて居るのであります。此の長柵を蒙古人は何といふかといふと、ホシヤと申して居ります。而して良い草の生えて居る所を、ブリヤート語でシャカと申して居ります。

家畜本位であるから、彼等の食物は總て肉食でやつて居ります。それから猶ほ蒙古などの方で、一種粟の——所謂モンゴルムム、粟のやうなものがあります。ブリヤートはそれを作らないが、茶の中に其の粟を入れて飲む風があります。茶を沸かした中に其れを焙してあつたものを入れて、之を食する、これは他の蒙古人のやつて居ることであるが、ブリヤートも矢張りやつて居ります、或は乳汁で其れを煮詰めるといふやうな風のやり方もある。酒も主にも乳でやつて居る、總て肉食であります。それから乳を以て色々の菓子を作る。又米利堅粉で菓子を作つて、膏油であげる仕方もやつて居る。斯ういふ風に好く茶を飲むが、外のことはやらない。羊の外に牛なども食べるけれども、羊が一番宜しいものにして居ります。それから鳥や魚などはブリヤートの方では食べない。例へば私の旅行中に、到る處に雁さか鶴などが居り、其の外の鳥も澤山居るので、一緒に參つた從卒や露西亞のコサツクなどは、鳥を捕つて今夜何か拵はうじやないかなど、計畫したこともあるが、ブリヤート人は非常にそれを嫌ふ。此の血の滴る鳥などを食ふのを見て非常に驚いて居る。これは殺生を忌むことから來て居る。内蒙古も外蒙古も決して鳥や魚は食べない、ブリヤートも矢張り其の風があります。さうして殺生を忌むけれども、羊など

の肉食は盛んにやつて居る。これは喇嘛の坊さんなどもさうで、此の方は殺生でないとして居るのであります。總て食物は自分の前にある小さな机のやうなものに載せて、踞座をかいて食べるか或は立膝で食べる、これは蒙古人と少しも變りませぬ。

それから住んで居る家はどういふ風であるかといふと、元はテントであります、羊の毛で團めた毛氈のテントであつたが、今はブリヤートの方は毛氈で作らない、蒙古人は盛んに作つて居る。けれども此處には貧乏の方がきたない毛氈のテントを張つて居るだけで、其の他は皆木で造つて居る、けれども木が段々無くなつてしまふと、毛氈のテントになるかも知れない。今此處ではザバイカル州インゴタ河流域の方面から木を持つて來て使ふので、其の方にはまだ木が澤山あります、但し此のあたりにはありません。牧場の界にする長柵などの方面に使ふ木は柳の枝で、これは此のあたりの河中に柳が大變生へて居るから、其の枝を取つて來て圍つて居るのであります。それで今日ブリヤートは、北の方インゴタ流域から持つて來る木で、奈良の正倉院のやうな校倉式の家を造つて居る。貧乏人だけはテント張りであるが、其の他は大抵校倉式の木造家屋であります。これはコサツクから來た風習であらうと思ふ。尙ほ露西亞の百姓の校倉式の一段變化した板はめの家を斯ういふ風に造つて居る(圖を示して)。斯んな屋根を有つて、千木は斯ういふ風になつてこれで以て、家を拵へて居ります。即ちブリヤートの家は我が校倉式で、其の上を木で屋根を葺いて居る、或は板で壁を拵へて居るものもある。それから家のプランは茲に一例

を云ふと、幅三間、奥行二間、而して此處に入口がある(圖を示して)。真中には必ず圍爐裡がある。蒙古人であるとき小さい圍爐裡であるが、ブヤートの方では大仕掛になつて居る。それから壁側の左右には箆笥を置いて、其中に寢床がある。寢床の前に板を並べて居る。而して奥の方から入口に向ふと、右の方の隅に佛壇が必ずあつて、釋迦の像とか観音の像とかいふやうなものが之に祀つてある。お客様があると、佛壇の方に坐ることになつて居る。それから入口から入つて右手の方に、乳汁を絞る道具とか勝手日用のものを置く所がある、即ち臺所が其處になるのである。斯ういふ風の家が總てブヤートの家の雛形であります。高さは大概一丈許りである。

それから風俗はどうかといふと、此にある通り(圖を示して)衣服は總て蒙古人と同じ風で、袖の長い筒袖であつて跣は足の方まで達して居る長衣である。ブヤートで他の蒙古と違つて居るのは、緑の合せ目の所で、二筋の緑りをつけて居る。一方は赤の緑りで一方はビロードの緑りをつけて居る。衣服の地の色は、藍、水色、桃色である。而して帶を締めて、腰には斯ういふ風な(標本を示して)小刀子——これは北海道のアイヌ、ウラルアルタイの民族が皆やつて居る——をつけて居る。足には長い靴を穿いて居り、頭の髪は辮髪である。露西亞化した者は散髪になつて居る。女子はどうかといふと、頭の髪を二つに分けて、日本古代の耳鬘のやうに左右に結んで居つて、珊瑚の頭飾を施し、又は銀製の耳飾りをして居る、此の風は矢張り外蒙古人もやつて居る。それから儀式の時、結婚の時、お祭りの時等、皆美裝

を取る風があります。それから喇嘛の風は、西域式の内外蒙古の喇嘛風と變りませぬ、矢張り西域語のお経や蒙古語のお経を有つて居る。殊に西域語で書いたお経は非常に尊いといふ意味から、多くそれを用ひて居ります。

それから製作品はごういふ風であるかといふと、もう毛氈は作りませぬ。その他何物も總て他から買ふのであつて、自分では作らない。唯だ自分の方で家畜或は其の皮などを賣つて、色々の物資を買求めるのであるが、一つ自分で作るのは斯ういふ風の桶であるとか、或は白樺で斯ういふ風な器具を作るとか(實物を示して)さういふことをやつて居るが、他の器具は總て支那と露西亞から入るのである。露西亞から入るのは近年のことで、其數も少なく、支那の方からは昔から入つて數多い。衣服の原料、首飾り等の裝飾品、喇嘛の器具、佛像など、皆此處から入つて來るのであるが、殊に庫倫、或は支那から入つて來るのが多い。斯ういふやうな状態になつて居るのであります。

以上申上げたのは、先づブリヤートに就いての風俗習慣であります。それであるからボルシエヰイキが此方に手を出さなければ、彼等の生活は物を買はなくとも差支ない。殊に家畜を有つて居るから、乳汁だとか或は肉などには不足しませぬ。唯だ米利堅粉のやうな食料品には困難して居る、例へばアギンスコエの町で、露西亞の商人が戸を締めて仕まつて、物資が入つて來ない。鐵道も役に立たない。それであるから米利堅粉のやうなものは少しも入つて來ないのであります。けれども家畜の値が非常に高く

なつて、ルーブルが下つて居るから、ブリアートの富の程度は高くなつて來たのであるけれども、物を買ふことが出来ない。萬金を懐ろにして居つても、買ふべき物が無いのである。其の内兎も角入つて來る品物は、マンヂユリや外蒙古の庫倫との取引が非常に多い。さういふ關係から此方と又取引が大變多くなつて來る譯であります。

それからブリアートに就いて御承知願ひたいのは、ブリアートでない民族がブリアートになつて居ることです。即ちツングースであるが、これはオーノン河、アガ河、シルカ河に掛けてのツングースがブリアートになつて居るのであります。私は其の一二村落を調査致しましたが、風俗習慣は全くブリアート化されて居つて、ツングースの固有の風俗習慣言語等は忘れられて居ります。それであるからハムニガンといふ地名が残つて居る、ブリアートはさういふ名を以て呼んで居ります。これは本とオーノン河からアギンスキー盟に掛けてツングースの土地であつたのが、ブリアートに征服されたのである。斯ういふことをブリアートは云つて居る。これは非常に面白い事實であります。

要するに今日のブリアートといふものは、先づ斯ういふ風なやうな状態であつて、バイカル湖の周圍に二十余萬人許りが生活して居るのであります。家畜も相當に有つて居る。久しく露西亞に服して居つたけれども、今は露西亞の手を離れた、ブリアートの理窟家が云ふ所に依ると、露西亞に征服されたのは仕方が無いけれども、ボルシエヰイキに服従する譯には行かない。而して自分の方で一派を立てなけ

ればならぬといつて居る。これは歐洲戦争の起りました當時から、ブリヤート若手連中がさういふ企てを有つて居つて、チタに事務所を置いて、雜誌を發行して盛んにプロバガンタをやつた。ブリヤートはブリヤートに依つて始めなければならぬ。而して更に進んで彼等と關係ある内蒙古、外蒙古、カルマークを通じて、即ち蒙古語を話す所の民族を通じて一種の世界的會議を小さくしたやうな、蒙古種族の聯盟を組織しようとするブリヤートの或ものが仕掛つた。これは日本でさういふ風に見るか、第三者が之に手を着ければ成立つであらうと思ふ。けれども日本は政治上何方にも關係が無いのであつて、露西亞があの通りになつた今日、何方かといふと、支那との關係が興味ある問題であらうと思ふ。若し支那に野心ある政治家があつて、蒙古民族の動搖に乗じて陰かに力を貸すやうなことがあつたら、朔北の天地にさういふ風雲を捲き起すかも知れない。日本人の目から見ると、人種上兄弟姉妹關係が無くとも、従兄弟叔姪に近い血筋の關係を有つて居る以上、これは日本人としてさうなるか注意しなければなるまいと思ふ。單に我々の考古學上、人類學上のみならず、實際問題として興味ある問題であらうと思ふ。

一体今日の極東民族といふものは、非常に妙な關係になつて参りました、例へば海拉爾に立つた所の呼倫貝爾の政廳の如き、太來諾爾から掛けてアルグン河の流域、興安嶺の西の方滿洲里から掛けて南の方貝爾諸爾、此のサークルを選んだ部分に一種の獨立國が出来て居つたのである。それが一昨年露西亞の瓦解と共に此の獨立國も無くなつて仕まつた。これは歐洲戦争の前、滿洲朝廷の滅亡した後起

つたもので、ソロン、ダウル、オロチョン、エリユート、ブリヤート、バラカ、斯ういふ民族が此の處に一種の獨立國を設けて、支那の手から脱しようとしたのであります。尤もこれには露西亞の後援があつたのであるが、一時は支那政府もどうすることも出来なかつたのである。それが露西亞の瓦解と共に、目的が途にして外れ、遂に獨立を取消して再び支那に併呑されたのであります。斯ういふ工合から見ると、ブリヤートといふものが支那の中華民國と接近しても、支那が統一出来ないで何もすることが出来ない、過激派にやられて仕まふ恐れがある。此等は注意しなければならぬ問題であらうと思ふさう考へて見ると、ブリヤートの問題は人種學上から申しても、蒙古人の研究として興味のあるものであり、又極東の地理、政治、宗教等の上から見ても注意すべき問題であります。これはどうしても文化問題及び日本を中心としてやつて居られる所の日本學界の方々も、極東に斯かるブリヤートといふ民族の存在して居ることを御承知あつて、日本の學者日本の教育者各位の御一考を願ひ度い。

